

# 見創見 Tuesday

抱擁についてのお話です。僕がはじめて「うわ、これが抱擁か」と思ったのは、小学6年生の頃。銭形警部に追いかけられるルパン三世ではなく、その元ネタである「怪盗ルパン」の全集を読んでいた時にした。

「先生、ほうようってどういう意味ですか？」  
当時30〜40代、どことなく雲田さんが桶田枝里子さんに似た活発で明るい先生は、僕の質問に「瞬とまどったもの、満面の笑みで「ほうよう」と叫んだあと、ぎゅっと僕を抱きしめた。僕は「うわ、これが抱擁か」と思った。僕は抱擁という言葉の意味を一生忘れないだろう。すさまじい教育効果だ。いや、これはただの教育なんかじゃない。先生に抱きしめてもらった出来事を、僕は一生忘れないだろう。先生にとっては何気ない振る舞いだ。つつたかもしれないけれど、僕にとっては、しあわせな人生の証拠のような思い出だ。しかし思い返してみると、その抱擁は、僕の八戸での最後の抱擁だった。

## はじめての抱擁

# 「地元定着」の盲点

18年間住んだ八戸と、18年間いっしょに暮らした家族と別れるその日ですら、抱擁されなかった。  
当時、小中野の六郷小児科さんや小僧寿さんの近くにあったバスセンター(今はコ



玉樹真一郎

八戸学院大  
地域経営学部特任教授

たまき・しんいちろう  
1977年八戸市生まれ。八戸高、東京工業大、北陸先端科学技術大学院大を卒業。2001年、任天堂に就職後、プランナーとしてゲーム機「Wii」を企画担当。退社後にUターンして企画コンサルティング業を営む。著書に『「ついで」体験のつくりかた』など。

こんな大切な別れの場面なら「行かないで!」と泣いてくる人もいるものだろう。ドラマチックなことが何もない別れの場面に拍子抜けしてしまったのだ。

今となれば、家族は「せつなくだから明るく見送りたい」とか、「いまさら照れくさい」といった理由で盛大に送り出せなかったのだろう。僕も親譲りの照れ屋だから、なおさらよくわかる。しかし、それで本当にいいのだろうか?  
人口減少・少子化の昨今、地方自治体は「地元定着」に熱心だ。行政や教育機関から、子どもたちをひたすら「地元に残れ」と言われ、残ると言

えは、ほめられる。もちろん、地元に残っていく子どもたちがいること自体は、何ら悪いことではない。しかしその裏には、地元定着の旗印の下では決してほめられない子どもたちがいる。夢に近づくために、誰かの役に立つために、八戸を離れること決めた子どもたちだ。

こんな理不尽なことがあつていいのだろうか?  
戦後復興期、集団就職で田舎を離れる学生たちは「金の卵」と呼ばれ、町ぐるみで盛大に祝ったそう。なんてやさしい時代だろう、なんてやさしい人々だろう。  
猛烈な祝福に背中を押されながら上野行きの列車に乗った子どもたちは、さぞ胸を高鳴らせたことだろう。車窓の向こうに、輝く未来を想像しただろう。そしてきつと誓ったはずだ。いつか地元のみ

なによりもこんでもらえるような人になります、と。  
この文章の結論は明確だ。地元に残る人だけに注目する。そんな地元定着なら、間違いなく失敗する。青森に残る子どもたちを祝うのと同じくらい、青森を離れる子どもたちも祝うべきだ。それがひいては青森を好きでいてくれる人を増やし、青森をもっとあたたかい場所にしてくれる。

子どもを送り出す家族の立場なら、やっぱりちゃんと言葉にするべきだと思う。お前のことが大好きだし離れたくもないけれど、どこにいても応援しているよ、いつだって気にかけているよ、と。いやいや、そんなこと照れくさくて言えないよ……なんて方には、オススメの方法があります。何も言わず、ただ抱擁すればいいんです。